

ライブスケジュール

4/13 (火) 新宿ロフト

SHINJUKU LOFT 5th ANNIVERSARY 「LOFT POWER PUSH DX」
OPEN/18:00 START/18:30
前売¥2,500 (D代別¥500)
w/ オープンキヨヲミ、Hermsen H.&The Pacemakers、グントウキ
オープニングアクト：吉妻ライオン
期：新宿ロフト 03-5272-0382

5/4 (火) SHIBUYA BOXX

MUSIC DAY 2004 「pta rookie Jack」
w/ スムムス、豊橋、トルネード増巻、OUTLOW
OPEN/17:30
＜招待ライブ／ptaによる招待受付は終了しました＞
期：ホットスタッフ・プロモーション 03-5720-9999
受付時間 16:00～19:00 で受け付けております

2004/5/13 (木) 下北沢 club Que

フジファブリック企画第3弾
倶楽部AKANEIRO

OPEN/18:30 START/19:00
w/ Great 3
前売 ¥2,500 (D代別) / 当日 ¥2,800 (D代別)
期：SMA/Hit&Run 03-5414-7318

5/23 (日) 福岡 DRUM Be-1

OPEN/18:30 START/18:00
前売¥1,800 (D代別)
w/ OLD、セカイイチ、東京90WATTS
期：キュードー百日本 092-714-0159

スペースシャワーTV 「ハイラインカウントダウン」内

「AKANEIRO TV」第四回
4月21日 21:00-21:30<初回>
4月22日 15:30-16:00
4月24日 27:00-27:30
4月26日 26:00-26:30

GbM 4月より志村正彦の連載スタート。

FM愛知 フジファブリックのラジオプログラム
「ラジオの季節」
4月1日～29日の月曜日～木曜日
23:55～24:00
メンバー日替わりでトーク中。

問) 東芝EMI Capitol Records 03-3587-9071
SMA Hit&Run 03-5414-7318

2004年4月14日発売

第1弾シングル-春盤-

「桜の季節」

TOCT-4709 ¥1,050



1. 桜の季節
2. 桜並木、二つの傘
3. 映像版「桜の季節」

全2曲+CD-EXTRA (映像版「桜の季節」収録)

2枚のインディー盤から選曲、再録し、ベスト盤を制作!

pre-debut盤 「アラモルト」

2004年2月18日発売
¥1,000 (税込) 限定5000枚

全7曲+CD-EXTRA
(フジファブリック初のステレオマスター)

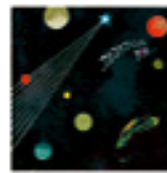
1. 茜色の夕日
2. 花屋の娘
3. 桜香花火
4. ダンス2000
5. 横状七号線
6. 浮世
7. 笑ってサヨナラ

第2弾シングル-夏盤-

初夏に発売!!



1st Single - 桜の季節
180Vinylbox out/CTSC-000



2nd Single - アラモルト
180Vinylbox out/CTSC-000

インディー盤 ディスクグラフィイ

official HP <http://www.fujifabric.com>



発行 フジファブリック

フジファブリックの

第3号

TAKE FREE

ありがとうございました。



江口寿史

知り合いの女子にももらったMDにはいった
「茜色の夕日」と「追ってけ」を聴いて
「ムム!! な何これ!? だだだ誰これ!?!」
となったのが1年前の春頃だったか。
新しいモノに、もはやいいモノなんかない、と
昔の音楽ばかり聴いていた耳たぶを
ものずごくまっとうな、音楽そのものの子カラで
グイーっと持ってったのがフジファブリック。
いい表現者にはみんな「変態」の部分が
少なからずあるものだと思えますが、
最近の若手で一番「変態」を感じたのが
このバンドの詞と曲を書いている志村くんだ。
いやホメ言葉。ホメ言葉。
ものずごく期待しております。

Great 3 片寄明人

フジファブリック、志村の書くメロディーは一度聴いたら最後、
脳に取り憑いて離れなくなる。
来る日も来る日も頭の中で無限ループしてしまうほどの麻痺性だ。

ASIAN KUNGFU GENERATION 後藤正文(Vo.G)

フジファブリックはヘンテコなバンドだと思う。
でもそのヘンテコなところにガッツリ胸を鷲掴みにされてしまう。

Rosetta Garden 桜井秀徳

校庭に散らばった無数の楽器、言葉、メロディー。
5人の子供達がそれらを手にとり足にとり、夢中で遊んでいる。
どこにでもある道具で、誰も考えなかった何かをやろうと、
彼らはやっきになっているように見えました。
やがて彼らが始めた遊び、それは僕がかつて見たことのない方法で、
この校庭でしか生まれ得ないマインドで繰り広げられ、
僕は思わずその場に腰をおろしてしばらく眺めてしまったのです。
へー、それは思いつかなかったわ、おー、おもしろー。
しばらくすると、同じように足をとめて腰をおろす人が
ちらりほらりと増えはじめました。「夢中で遊ぶ」、
これは最高のエンターテインメントなのです。
おなか空いたのも気付かない程、
いったんさい! フジファブリックの皆さんよ!

氣志團 星ノランマニエ

お! 僕はまちやひこ君の事しか知らないんですけど、みんなすごいですね。
フジファブリックはすごいですね。でも氣志だんはもっとすごいです。
…いや、やっぱ同じくらいかな。これはどっちもすごいから幸せだな。やったー!

YOKING

ようこそ、楽しい音楽生活へ。がんばってね。オレもがんばる。

奥田民生

フジファブリックのみなさまへ
君たちには、
これからSMAを
しよって立ってもらわんといかん。
ので、がんばっちゃくれ。
1000万枚売っちゃくれ。
ハワイにも連れてっちゃくれ。
マチコさんも連れてっちゃくれ。

Puffy 吉村由美

- ㊦ ジの皆様
- ㊧ つはあたくし
- ㊨ アンなのだ。
- ㊩ っちゃけ MK5 なのだ。
- ㊪ ばになって
- ㊫ わしておくれよ うまい飯。

和田ヲチヲ

深夜、編集者と電話で長々と打ち合わせ。
その後、のらりくらりと仕事をしつつ「フジファブリック」の
『茜色の夕日』を聞いたらグッと来た。朝方だけだ。
……以来、『茜色の夕日』は名曲だと言い続けてきた和田ですが、
もっともっとイイ曲を聴かせて下さい! 期待してます!



フジファブリックにひとことお願いします。

贈る音楽。

——「桜の季節」を聴いてみて、改めて情感豊かなギターだなあと感じましたよ。
「それは高調してないんですけど、自然にそうなるんですけど。『桜の季節』をまず最初に聴いた時に、なんてイイ曲なんだと思って。で、自分の中で桜が散るようなイメージを描いて、それをそのままにギターで表したっていうか、散り際の感じを無意識のうちにギターで表したっていう。普段から技巧的には何にも考えてないんですけど。音も歌も歌詞も全部頭に詰め込んでから、技巧的にどうこうっていう風に考えてる余裕がないんですよ。それよりは情感を大切にしたいというか、変に技巧的に考えちゃうと音が変になってしまう気がするんですけど。歌詞がのってない時は、音のインスピレーションのままに、メロディから想像するものを直感的に弾きますけど」

——書感で弾いてると、さっき志村君が言ってたんだけど、後から聴き直すと改善すべ点がたくさん見えてこない？

「毎日のように聴いてますけど、僕はそういうのは全然思わないです。コレはコレで終わり、じゃあ次！っていう風に思うんですよ。満足、不満足関係なく、その時に自分が思ったイメージそのままを弾いてる訳だから、聴き直してみても後悔する事はないですね」

——それって性格的な問題なのかねえ（笑）。

「僕、スゴイ大雑把な性格なんです。無神経な性格って、よく言われます（笑）。次から次には進みますけど」

——じゃあ自分で次の展開として、曲を作るのがしないの？

「曲はすでに出来てるんで、やってみたいなあとは思うんですけど。じゃないと自分がミュージシャンとして成長せえへんなあって思いますし、でも、自己満足の曲ばかりです。よくミュージシャンのインタビューとか読んでると、よく夜中に曲作って言いますが、僕は完全に寝起きです。寝起きは最高なんです（笑）。夜中だといろいろ考えちゃうんで、寝起きなら何にも考えないで弾けるっていう」

——1曲作って一日が始まるなんて、すごい効率いいね。で、みんなに聞いているんだけど、春の思い出とかってある？

「春が一番感じるのは空気っていうか気温と匂いですね。花が何かの匂いが混じった片思いの匂いというか、それを春が来る度に感じますね。毎年、同じ女の子の事を思い出しますが、あの子は何してんのかなあ？って（笑）」

——すごいロマンチックじゃん。

「ほんまにその子の事、好きなんちゃうん？って、自分で思うんですけど、実際に会ってみると全然思わないんですよ（笑）。そんな事を毎年、毎年思い出してる自分も好きです（笑）。そんな事、小学校の頃とかならありえなかったもんなあ。『桜の季節』の『桜並木』の歌詞と少しリンクしてるんですよ。歌詞を見た時、ドキッとしましたよ。コイツ、何、俺と同じ事考えてんねって（笑）」

——年の冬の春盤のレコーディングの時って大変だったらしいけど。

「脱臼して手が痛かったのを、まず思い出しますね（笑）。ドアに手を挟んだんですけど、軟骨が割れちゃったんです。『桜の季節』ってピアノが生じちゃなくて、自分のいつも使ってるピアノもどきと、ピアノのサンブラーみたいなのでやったんですよ。生のピアノみたいにタッチが繊細なものではなくて、押せばある程度ちゃんとした音が出るっていう楽器だったから、助かりましたけど。でも、弾くのはちょっと辛かったかな。首通は一発で弾けるのを5回ぐらい録り直したり、全部人さし指で弾いたのもあったから」

——それは辛いねえ。ライブを観てと思うんだけど、いつも気持ち良さそうに弾いてますよね。

「弾いている自分は気持ちいいんですけど、自分の姿を改めて見ると気持ち悪い（笑）。お客さんへの見せ方って、悪いですよ。特に鍵盤っていうのは動きが少ないし、お客さんに見えにくいっていう面がある。それを今どう見せようかって思ってる最中なんです。で、昔の鍵盤を弾く人と今の人とを比べると、音の人の方が何故かカッコイイ。昔の人みたいに、弾きにくそうに弾くのがカッコイイって思ったんですよ。特に70年代によくある、鍵盤で自分の四方を囲むような感じで、たくさん鍵盤並べて、わざとピアノの反対側の弾きにくい所にオルガン置いて弾いたりとか、ああいう見せ方はアリだなあと思った。でも、それはオルガンなら本物のオルガン、ピアノなら本物のピアノが、ステージにあるのが前提な話で。今って、ピアノもどきな楽器に変わってますよね。ステージの狭さって問題もありますけど……。みんなホンモノの生の楽器でやってるのに、自分だけピアノっぽい楽器を使ってる事に対して、引け目というか、モヤモヤ感が残りますね」

——生じゃないとは言え、鍵盤楽器なら音色だけで充分に自己主張できるんじゃないですか？

「そうですね。それで言ったら、今回の夏盤は“金澤 祭り”（笑）。さっきの話で言うと、春盤はピアノの音が出る鍵盤楽器、オルガンの音が出る鍵盤楽器っていう感じだったんですけど、今回はピアノもオルガンも生です。しかも春の時と違って脱臼もしてないし、弾きまくりますよ（笑）。でも、自分が楽しいって思える音を見つけるのに苦労したし、たぶん自分が一番レコーディングに時間かかりました。最終的にはバンドの音が、もっと色濃く見えるような感じにはなったけど」

——夏盤の話になっちゃったけど、春って聞いて想起する事ってある？

「春って一週間だけ好きなんです。今はまだその一週間じゃないんですけど、そわそわする一週間ってというのが必ずあるんですよ。タイミング的には桜が咲く頃なんですけど、風の匂いが明らかに違う一週間。その一週間だけはハッピーですね（笑）」

——「桜の季節」とは言え、春らしくない感じがするんですけど（笑）。

「そうですね。いわゆる春っぽい感じが全面に出るのは好きじゃないんですよ。って言うか、似合わない（笑）。唯一春っぽいのは、若者が自転車をこいで走ってる的なイメージの、爽やかな展開が途中であるくらいですね。今までそういうのやった事がなくて正直とまどいましてけど、サビの間抜けのメロディを付けたら、対比が面白くて、こういうのならやってもイイかなって。季節感を入れるのはあんまり考えてないんですけど、冬だとやりやすいかもしれぬですね。暗いの好きなんで（笑）。冬っぽい曲で『黒服の人』っていう曲があるんですけど、真冬の舞臺の風景を描いたロックな曲で、それをぜひ入れたいなあ（笑）」

——それは嫌しそうだなあ（笑）。春って言えば、恋の季節とかよく言われるけど、思えばラブソングらしいラブソングってないよね。

「ラブソング……ないっすね（笑）。秋以降はどうなるか分からないんですけど、君の何とかが大好きで〜みたいな、べたべたのラブソングはないっすね。昔はそういう曲を聴くと虫腹がはしたんです。ドラマの世界のような感じで、リアリティがないから。でも、今は逆に作ってみたいかな。やるとしたら、教則本みたいな言葉だけは並べたくないですね。歌詞の内容が自分からかけ離れないように、自分が言ってもウソ臭くならないように、リアリティが出るようにしたいです。人それぞれ恋愛に関して見方は違うにしても、言いたい事は一緒だったりするんじゃないですか。それはちゃんと押えつつも、奇を衒う感じではなく、訳の分からない歌詞を付けてみたり（笑）。その後で真面目な歌詞がくると、また変な印象やリアリティが生まれると思うんですよ。または、ラブソングとまでは言わないけど、幸せを感じる音みたいなもので、ロック的なアプローチが出来たらやってみよう」

——春でイメージする事で他にある？

「最近では花粉で辛いっていうイメージしかないですね。6〜7年くらい前から花粉症なんです」

——花粉症の歌とかないかなあ。

「それはある意味ロックですよ（笑）。絶対、曲の中でくしゃみします（笑）」

——そういうくだらない事を考えられる分、余裕が出てきたというか、成長した感じはしません？

「くだらない事を考えるのはいつもの事なんですけど、成長したとは思っていません。でもその分、理想が高くなったんで、それに追いつく楽曲を作るのが大変ですね。メンバーも胸のイイ人達が入ったので、それに対するプレッシャーもあるし。理想は名盤を作る事なんですけど、今って、ロック名盤って呼べる名盤があんまりないじゃないですか。そういうのを作りたいですよ。10年後でも聴けるような」

——T V (「FACTORY」)のライブ観てたら、何故か一番カッコよく見えましたよ（笑）。

「ありがとうございます（笑）」

——淡々とグルーブを紡ぎ出す姿が。で、春盤なんですけど、いつもよりグルーブ感が強調されてるようにも聴こえたんですけど。

「音を出す時に全員が一纏の方向に向いていたいし、それが揺るぎないものでありたいって、いつも思ってるんですけど、それは特に大切にしました。ドラムとリズム・ギター、そして僕のベース3点っていうのは、バンドのグルーブを生み出す元になるもんですから、気合は入りませぬ。リズムやグルーブがカッコイイト、上モノのピアノやギターもカッコよくなれると思いますし。春盤の頃と比べると、今はかなりグルーブ感も増してきたし、音が寄り合ってるような感じが濃くなりましたね。スゴイ殺伐とした雰囲気の中で作った事がないので分からないんですけど、グルーブって、人間関係やいろいろんなものが関係してくるんと思うんですよ。でも、このバンドは、みんな仲が良いから、より一体感が生まれてくる。レコーディングの時は、メリハリをつけながら、プチ体育会系な感じでやってはいるんですけど（笑）、笑いは絶えませんね。テクニク的な面では、至らない部分とかがあったりして、自分の中では課題が多いけど」

——変化のある展開や、リズムの構築に関してはどう思いますか？

「展開に富んでいた方が、やってる本人からしたら楽しいですね。これにはこれが合うだろうっていうフレーズを、完璧に考えて弾いたりとか、ヒップホップみたいにワン・グルーブですつと通すっていうのも好きなんですけど、いろんな色を出していける方が楽しい。展開が変る毎に、考える事は多いんですけど、楽しさもそれだけ大きいです。展開が多いからこそ、ドラムとリズム・ギターとベースの3点が、しっかりしていないとって改めて思いますね。上モノが安心できるような体勢を、こっちは作ってあげないって言う」

——ベースは音の土台作りにおいてかなり重要だもんね。で、春盤にかこつけてなんだけど、春の思い出ってある？

「春っていうと入学式・卒業式とか、新しいクラスとか、心機一転的な感じがありますね。個人的には春についての思い出は、あんなないんですけど、席替えでカワイイ女の子と一緒に嬉しかったっていう記憶はあります（笑）。全然関係ないんですけど、春ってクラス代えがあるじゃないですか。で、中学校2年ぐらいの時なんですけど、クラスの前に紙が貼られて、そこに名前と一緒に出身小学校が書いてあったんですけど、そん中でケニアっていうのを発見しまして（笑）。単なる部子女だったんですけど、かなりのインパクトがあったの思い出しました。春らしい思い出では全くなかったですね（笑）」

——春盤の時って、後からバンドに入ってきたばかりで、音的にぎくしゃくしなかった？

「誰かがグルーブのイニシアチブをとるかっていうのが、まだその頃、はっきりしてなかったですね。今は試行錯誤しながらも、全員ドラムに合わせる感じになってはいます。はちゃめちゃなドラムがいて、それにみんなが一生懸命に合わせていて、みんなでなるっていうのが、ロックの醍醐味だと思うんですよ（笑）。キース・ムーンとか、ジョン・ボーナムとか、昔のロックの名ドラマーって、周りに左右されたりしないじゃないですか。場合によっては周りの音に合わせますけど、俺が絶対だ！俺がメトロノームだっ！みたいな感じで（笑）。そういう風に今後っていきたいですね」

——何、言ってるのが分かるねえよ（笑）。それにしてもココのスタジオ、おしゃれすぎない？ 海は見えるし、変なヒロ・ヤマガタみたいな絵が飾ってあったり……ロックな環境じゃないじゃん（笑）。

「ココはロックじゃないですね（笑）。僕の中でロックな感じのスタジオって言うとか、ヴァン・ヘイレンのスタジオなんです。機材も何もかも全て揃ってるみたいな。あれはスゴイですよ（笑）」

——エディの自宅のスタジオだったっけ？ じゃあ自宅にスタジオ作れる？

「えっ、まだローンも組めないっすよ（笑）」

——ライブやレコーディング前の、自分の中における心構えってある？

「まず体調です（笑）。やっぱドラムは自分の体調が音に出ちゃうんですよ。ライブは特に音が響ちやいますね。パワー感とか出す為には筋肉も付けなくないといけないし。その為に筋トレは毎日やってますよ。免疫力を高める為に（笑）。サウンドスケープ的な音によって情景を生み出す感じも好きなんです。早く時のメリハリをちゃんと付ける為には、やっぱり体を大切にしないと。あとライブだと、ドラムはどうしても後ろに隠れてしまうので、よく見せる為にオーバーアクションの練習とか（笑）。キース・ムーンみたいに毎回ドラムぶっ壊したいんですけど、金がないんで（笑）」

——春盤って事で、春に対するイメージや思い出を語ってもらいたいんですけど……。って、みんなに聞いて、いい加減うんざりするなあ（笑）。

「春は花粉が多い……後は人事異動ぐらいですかね（笑）。一年の中で一番好きな時間は、年末のクリスマス終わった後の土曜日の新宿なんです。そこを車で走ると最高なんです。みんながハッピーライブを送ってる、イルミネーションがキレイな中を、独り物悲しく車で走ってるっていう（笑）。春はあんまり好きではないですね。春っていう季節が素直に喜べない（笑）。春の思い出ってホントないですね。春休みに新しい楽器買ったりとかが、元々キーボードだったんで、『キーボードマガジン』読み返したりとか。何のときめきもないですね、春には（笑）」

山内総一郎



G

金澤ダイスケ



Key

志村正彦



Vo&G

加藤慎一



B

足立房文



Dr

フジファブリック

インタビューの季節 -春-

文・保母大三郎／写真・スージー／デザイン・柴宮夏希 (nemo graph.)

プレ・デビュー盤『アラモルト』（発売中）は、日本語ロックの可能性はまだ無限大である事を、高らかに謳い上げるかのような作品だった。マジで。「聴けば、情景が浮かんでくるような音」とは、使い回されたちょうちん言葉だが、極私的な情景を、普遍的なものへと転化させるだけの力とワザを、フジファブリックは持ち合わせていると思う。数多の自分探しパカ系や、カラオケBOX直送系アーティストにはない、圧倒的な歌の實在感。心の中の声にならない叫びを代弁してくてるような彼らのサウンドは、何度聴いても飽きがこない。後ろ髪ひかれるような聴後の余韻もまた格別だ。もはやトリプルA保証の、抜群の信頼度を誇るその音は、1stシングル『桜の季節』aka春盤によって証明されている。桜の季節とは言え、今だ流行りの、意味もなく前向きで、脳天気な桜系の歌詞とはまるで違う。春だからって、誰もが明るくときめいたり、MajiでKoiする5秒前（死語）なんてドキドキする事、毎年ある訳ねえじゃん。彼らの提示する『桜の季節』は、そんな絵空事では決してない。と、その真相を探るべく、ウォーターフロントにあるハイツでセレブな（W死語）おしゃれスタジオにて夏盤ミックダウン中の彼らに、プチ突撃インタビューを敢行。